論　文 ニダバ (*Nidaba*) 38(2009), 88-97

日本語のウレシイ／タノシイと朝鮮語のkippɯta/cɯlkɔpta について

深　見　兼　孝

1．研究の目的

「喜び」を表す代表的な形容詞として、日本語のウレシイ／タノシイ、朝鮮語のkippɯta/cɯlkɔptaを取り上げ[1]、ウレシイ／タノシイとkippɯta/cɯlkɔptaが各々どのような意味特徴によって区別され、また、それが日本語と朝鮮語でどのように異なっているかを明らかにすることが本稿の目的である。

2．先行研究と問題点

便宜上、類型、構文、意味の観点から、先行研究を概観する。

2-1　類型

寺村(1982:139-154)は「コトの類型」に「感情表現」を置き、その中に述語が形容詞である「感情の直接的表出」と「感情的品定め」を含めている。前者は「感情形容詞」が担い、後者は「感情的性状規定の形容詞」によって表現されるとし、後者はさらにその外側に「属性規定」とつながるとしている。寺村(1982)ではウレシイとタノシイを「感情の直接的表現」を表すものとしている。

一方、유현경(1988)は現代朝鮮語の形容詞を「客観形容詞」と「主観形容詞」に大別し、後者の１類型として「心理形容詞」を設定している。유현경(1988)によれば、kippɯtaは「心理形容詞」の一種である「原因心理形容詞（ある事実や事が原因となって誘発された経験主の心理状態を叙述するもの）」(유현경1998:54-80)であるが、cɯlkɔptaには言及がない。

2-2　構文

寺村(1982)によれば、日本語の「感情の直接的表出」は「感情主(X)ガ（まれにX ニ）‥‥対象(Y)ガ～」という構文を取る（「～」に述語である形容詞が入る）。一方、유현경(1998)は朝鮮語の「心理形容詞」は「経験主-ka....対象／原因-ka」という構文を取り(유현경1998：81)、経験主をマークする -kaは-ekeと交代しうるとしている(유현경1998：54-69)。

寺村(1982)は、例文から察するに「感情主」はハで表示されるのが通常と考えているようであり、유현경(1998)も「経験主」は主題の-nɯnはで表示されるのが普通としている。また、ニはやりもらいの相手を示しうるが、-ekeも本来与格助詞で、やりもらいの

相手を示す。したがって、この限りでは、ウレシイ、タノシイとkippɯtaは並行的な構文を形成するように見える。

しかし、유현경(1998)によれば、「原因心理形容詞」が同じ「心理形容詞」の一種である「対象心理形容詞」と区別されるのは、「原因心理形容詞」構文の「原因」を「省略しても非文にならない」(p.83)からであり、「原因」の項を副次的な要素と見なしている。一方、寺村(1982)は「感情の直接表現」における「感情主」は「通常の独立文では主題化して、さらに省略される」(p.150)としているが、必ずしも「感情主」を副次的要素と考えてはいないようである。しかし、西尾(1972)によれば、タノシイは必ずしも対象がなくてもよい(p.31)。

次に、西尾(1998: 15)によれば、ウレシイが述語用法が多いのに対し、タノシイは連用用法・連体用法が多く見られるとする。一方、임홍빈(1993: 73)はcɯlkɔptaはkippɯtaに比べると人称制約が緩いとしている。

2-3 意味

森田(1977: 111-113, 280-282)は、ウレシイが「ある状況に接し、それと自己とのかかわり合いにおいて、晴れやかな明るい気持ちになる」ことであるのに対し、タノシイは「ある環境、場面、状況に身を置くことによって、緊張感や不快感が消え、喜びを切に感じる状態」としている。次に、喜びを起こすものについて、ウレシイは「自己へと向けられた、喜びを与える事物、自己へと向けられた、喜びを知らせる内容のもの」であり、タノシイは「感情を起こす直接の対象を持たない」とする。また、文面に出るのは、ウレシイが「うれしい気持ちを起こさせる原因、こちらがうれしいと受けとる内容」であるのに対し、タノシイは「自己が置かれて楽しい気分になれた場面や環境、状況」であるという。さらに、ウレシイが事柄や内容に対する「即事的な」感情であるのに対し、タノシイは「継続的な」状態であるという。

西尾(1998: 14-15)は、ウレシイは「あることが生じたり、何かを知ったりした時に、それが自分にとって望ましい、価値の高いことで、心がおどるように明るくなった状態を意味する」のに対し、タノシイは「快と感じられることに加わって味う、持続的なみちたりた感情と言えようか」としている。また、ウレシイは「感じる主体の個人性、内面性と強く結びついている」のに対し、タノシイは「対象自身の属性や人々の間にかもしだされる雰囲気」などにも使われ、「わりあい一般的な、表層的なことろがある」としている。

一方、임홍빈(1993: 73)は、kippɯtaが「困難なことが解決されたとか望みが叶って人が気分のよい状態にある」ことであるのに対し、cɯlkɔptaは「動きあるいは活動に直接あるいは間接的に関連して体にいい感じを持つことを意味する」としている。また、kippɯtaは「主にある事実に対する心理的反応」であり、「情緒的経験であると同時に、kippɯtaと感じる事実に対する判断の意味をより多く含む」のに対し、cɯlkɔptaは「判断の側面より経験の側面が強い」としている。

2-4 問題提起

先行研究から、ウレシイ／タノシイとkippɯta/cɯlkɔptaの二番目の補語が「対象」か「原因」かという違いがあるように見える。しかし、「対象」にしろ「原因」にしろ喜びを喚起するものであることには違いはなく、意味の区別の上で大きな要素ではないだろうと思われる。また、この補語はウレシイ以外は構文上の必須要素ではない可能性があるが、これはさらに検討が必要である。以下、このことは取り上げないことにする。

さて、意味に関する先行研究の記述のしかたを見ると、ウレシイは経験主と喜びを喚起するものの関わりや、喜びを喚起するものの性質が記述されていることが分かる。また、タノシイも喜びを喚起するもののについて記述されている。このように、ウレシイ／タノシイは、どちらかと言えば喜びを喚起するものに傾斜した記述がなされている。これに対し、kippɯta/cɯlkɔptaは経験主自身に立脚した記述がなされている。

このような記述のしかたの違いから、結局、1)ウレシイ／タノシイは喜びを喚起するものの個別性の程度で、kippɯta/cɯlkɔptaは経験主の判断の強弱で区別され、ウレシイ／タノシイとkippɯta/cɯlkɔptaを区別する原理が異なっているのではないかということが推測される。ウレシイは経験主個人と結びついた、経験主の内面を描写する傾向があるために、喜びを喚起するものも個別的と言えよう。これに対し、タノシイはウレシイに比べると経験主個人との結びつきが弱く、より一般的な喜びの状態なので、人称制限が緩く、その結果、連用用法・連体用法が多く用いられるのであろう。一方、2)ウレシイ感情を喚起するものは「物事」や「内容」、「生じたこと」、「知ったこと」、kippɯtaの場合は「事実」で、よく似ている上に、「それが自分にとって望ましい、価値の高いこと」とは、経験主の判断の結果にほかならないだろう。また、3)タノシイは「緊張感や不快感が消え」た状態、cɯlkɔptaも「体にいい感じを持つこと」であるので、両者とも快感・快楽に近い意味を表すと考えられる。また、感情を喚起するものもタノシイが「状況・場面」、cɯlkɔptaが「動きや活動」で共通性があると言える。さらに、タノシイもcɯlkɔptaも人称の制約が少ないことも共通している。

次に、日本の小説とその朝鮮語訳[2)]からウレシイ／タノシイがどのように翻訳されているかを見る。その結果が次の表である。

ウレシイ／タノシイとkippɯta/cɯlkɔptaの対応状況（カッコ内は実数）

	kippɯta	cɯlkɔpta	その他	計
ウレシイ	45.1(55)	9.0(11)	45.9(56)	100.0(122)
タノシイ	3.1 (2)	54.7(35)	42.2(27)	100.0 (64)
計	30.6(57)	24.7(46)	44.6(83)	99.9(186)

表から、ウレシイもタノシイも、kippɯtaとcɯlkɔptaのどちらにも対応しない例が４割以上あると同時に、ウレシイとkippɯta、タノシイとcɯlkɔptaが対応している例が５割前後あることが分かる。上の1)、2)、3)と符合すると言えよう。

しかし、ウレシイとcɯlkɔptaの対応も１割弱見られ、ウレシイとcɯlkɔptaの間にも何らかの類似性があるのではないかと推測される。また、タノシイを「表層的」とした場合、

「喜びを切に感じる状態」とか「満ち足りた感情」という記述と矛盾するように思える。また、上の1)、2)、3)が相互にどう関連するかも明らかではない。以上の先行研究や翻訳の様相から推測されることを合理的に説明するのが、次の課題である。

3．喜びを喚起するもの

ウレシイの場合、喜びを喚起するものが、相手の発言の内容であることがある。しかし、kippɯtaと対応しているときと、cɯlkɔptaと対応しているときでは違いが認められる。

まず、(1)を見られたい[3]。ウレシイはkippɯtaと対応している。(1)はいろいろなモノたちが議論をしている場面である。「靴」は、議論の中で「名刺」の主張と自分の考えが一致するかどうかを判断し、一致したと判断した結果、ウレシイと感じている。kippɯtaが判断の側面が強いという先行研究を裏付けるだろう。ところで、「靴」は「名刺」の主張の内容に関連した行動を取るわけではない。「靴」は他者（名刺）の意見に賛意を表明することで、発言権を確保しようとしているが、他の意見であってもそれに賛成であれば同じことを言うであろう。その意味で「靴」の発言権を確保しようとする行為は、「名刺」の発言内容とは関連がない。

(1a)「なるほど、その考え方は論理的だ。おれは論理的なものが大好きなんだ。そういう表現を耳にするとおれは高尚な気持になってしまう。」と名刺は急に大人しくなって、「だが、一寸むつかしい。こういう理論を主体的に把握するために時間をかけなければならん。」「おれもそう思う。」と靴がうれしそうに、「だからおれは言おうと思っていたんだ。

(1b) "kwayɔn kɯ sakopaŋsik-i nonlicɔk-i-kun. na-nɯn nonlicɔk-i-n kɔs-i coh-a.
なるほど　その　考え方－主　論理的－叙述－感　1代－主題　論理的－叙述－冠　もの－主　いい－終

kɯrɔn phyohyɔn-ɯl kwi tam-ɯmyɔn na-nɯn kosaŋha-n kipun-i twɛpɔryɔ." hako
そんな　表現－対　耳　入れる－条件　1代－主題　高尚だ－冠　気分－転　なる·完·終　引用

myɔŋham-ɯn pyɔrankan yamcɔnhɛcyɔsɔ, "kɯrɔna yakkan ɔryɔwɔ, irɔn nonli-rɯl
名刺－主題　突然　おとなしくなる·接　しかし　若干　難しい·終　こんな　論理－対

kuchecɔk-ɯlo phaakha-ki wihɛ sikan-ɯl kac-ci anh-ɯmyɔn antwe-kess-ɔ."
具体的－具　把握する－名　ために　時間－対　持つ－義務－推量－終

"na-to kɯrɔh-ke sɛŋkakhɛ." kutu-ka kippɯ-n tɯsi mar-ɯl i-ɔt-ta. "kɯrɔki ttɛmun-e
1代－添加　そのようだ－副　思う·終　靴－主　KIP－様態　言葉－対　続ける－過去－終　そうだ·名　ため－処

nɛ-ka malha-ryɔ ha-n kɔ-ya."　（『壁』07613/19719）
1代－主　言う－意志　する－冠　もの－感

一方、ウレシイがcɯlkɔptaと対応している場合、(1)のような他者の主張と自分の意見が一致するような場面を描写した例はなかった。(2)を見られたい。(2a)の「幻心入道」の喜びを喚起するものは、「首領」の指示内容である。すなわち、これから（バッタの）解剖をするが、それは「腹から割る」ように行われるという事実である。しかし、「幻心入道」は、首領の指示によって、そのようなやり方の解剖に参加するか観察ができる。(2b)ではcɯlkɔptaが用いられているが、喜びはそのことによって喚起されていると考えた方がいいように思える。すなわち、先行研究で言う、cɯlkɔptaの経験的側面が出ていると言えよう。また、この場合「首領」の発言内容は、解剖のやり方を指示しているという意味で、「幻心入道」の経験と関連性がある。

(2a)「腹から割るんだ」と、首領が言った。「ケエボーだ」と、幻心入道がふくれた顔をほころばして、ひどく嬉しそうに言った。

(2b)「pɛ-puthɔ karɯ-nta.」 hako tumok-i malhɛt-ta. 「tancaksɯrɔp-ta.」 rako,
腹－分離 割る－終 引用 頭目－主 言う·過去－終 しみったれだ－終 引用

kensinnyuuto-ka ttuŋttuŋha-n ɔlkul-ɯl silluki-myɔ mɛu cɯlkɔun tɯsi malhɛt-ta.
幻心入道－主 太っている－冠 顔－対 ぴくぴくさせる－接 非常に CLK·様態 言う·過去－終

(『天井裏の子供たち』09816/12517)

次の(3)も同様に考えられる。(3a)で「田所博士」の喜びを喚起するのは、相手の発話全体の内容、もしくは相手が「阿蘇の上を飛んでみたい」という自分の気持ちを理解しているということと解釈できるが、(3b)では「阿蘇の上を飛ぶ」という経験と解釈できる。この場合も、準備が順調に進んでいるという相手の発言内容と、それによって「阿蘇の上を飛ぶ」ことができるという自身の経験には関連性がある。逆に、ウレシイがkippɯtaと対応しているとき、経験主の感情の表出や相手の遂行的発話に従うことを描写した例はあったが、他者の発言内容と経験主の経験が関連すると思われる例はなかった。

(3a)「海軍の連絡機が出ます。D-2計画が、どうやらOKらしいし、そうなったら、計画用に海上自衛隊のヘリと連絡機が、この計画専用に使えるはずです。——どうせ阿蘇の上を飛んでみたいんでしょう？」田所博士は鼻を鳴らしたが、ちょっとうれしそうだった。

(3b)"hɛkun-e yɔnlakki-ɯl iyoŋha-pnita. ama D-2kyehwek-i sɯŋintwe-l moyaŋ
海軍－属 連絡機－対 利用する－終 たぶん D-2計画－主 承認される－冠 もよう

-i-pnita. kɯrɔh-ke twe-myɔn hɛsaŋcawitɛ-e hellikhopthɔ-wa yɔkɛkki-rɯl cɔnyoŋ-ɯro
－叙述－終 そのようだ－副 なる－条件 海上自衛隊－属 ヘリコプター－共 旅客機－対 専用－具

ssɯ-ke twe-l kɔt kat-sɯpnita. amurɛto asohwasan wi-rɯl nal-ko siph-ɯsi-cyo?"
使う－副 なる－推量－終 どうせ 阿蘇山 上－対 飛ぶ－願望－尊敬－終

tatokoro paksa-nɯn khotpaŋkwi-rɯl kkwi-ɔt-ciman yakkan-ɯn cɯlkɔwɔ poyɔt-ta.
田所 博士－主題 鼻を鳴らす－過去－接 若干－主題 CLK·副 見える·過去－終

(『日本沈没（上）』24315/17823)

喜びを喚起するのが他者の発言内容でなくても同様なことが言える。(4)を見られたい。ウレシイはkippɯtaと対応している。「ラクダ」の喜びは、彼を彼と認めたことによると解釈できるが、「認める」のような認知活動そのものを表す動詞は、ウレシイがcɯlkɔptaと対応する場合には見られなかった。また、ここの「鼻をならす」は単に嬉しさの表出であろう。

(4a)電話が切れるのとほとんど同時に、ノックするものがあり、ドアを開けてやるとラクダがにゅっと鼻面をつき出して、彼を認めるとうれしそうに鼻を鳴らしました。

(4b)cɔnhwa-ka kkɯnhɔci-nɯn kɔt-kwa kɔi toŋsi-e, nokhɯha-nɯn ca-ka iss-ɔsɔ,
電話－主 切れる－冠 こと－共 ほとんど 同時－処 ノックする－冠 者－主 ある－接

mun-ɯl yɔr-ɔ cu-ɔt-tɔni naktha-ka khotcantɯŋ-ɯl nɛmil-ko, kɯ-ɯl arapo-ko-nɯn
ドア－対 開ける－副 与える－過去－接 駱駝－主 鼻－対 出す－接 彼－対 分かる－接－主題

kippɯ-n tɯsi kho-rɯl ullyɔt-ta. (『壁』13812/24622)
KIP·様態 鼻－対 鳴らす·過去－終

続いて(5)を見られたい。ウレシイはcɯlkɔptaと対応している。(5a)では「校長先生」の喜

びは「（生徒たちが）次々に（自分の）肩や腕に、ぶらさがったりとびついたりした」ことによると解釈できる。しかし、同時に、「よろけながら」とあるように、「校長先生」は生徒たちが自分に「ぶらさがったりとびついたり」した衝撃や重さを経験し、恐らく笑っているだろう生徒たちの笑顔を目の当たりにしていると考えられる。cɯlkɔptaが用いられているのはそのためであろう。

(5a)そして、あんまり、うれしいので、次々に、校長先生の肩や腕に、ぶらさがったりとびついたりした。校長先生は、よろけながら、うれしそうに笑った。

(5b)ai-tɯl-ɯn nɔmu kippɯ-ko sin-i nasɔ ittar-a kyocaŋsɔnsɛŋnim-e ɔkkɛ-myɔ
子供－複－主題　あまりに　KIP－接　浮き浮きする気持ち－主　出る·接　続く－接　校長先生－属　肩－接

phar-e mɛtalli-ko ɔŋkyɔputh-ɔt-ta. kyocaŋsɔnsɛŋnim-ɯn pithɯlkɔri-myɔnsɔ-to
腕－処　ぶらさがる－接　まとわりつく－過去－終　校長先生－主題　よろめく－接－添加

cɯlkɔun tɯsi us-ɔt-ta.　（『窓ぎわのトットちゃん』08501/06820）
CLK·様態　笑う－過去－終

以上のように、先行研究の指摘通り、kippɯtaは判断的側面、cɯlkɔptaは経験的側面が強いと言える。

ウレシイに対しタノシイでは、喜びを喚起するものが文面に表れている例が少ない。また、文面に表れていても、具体性に乏しいことが多い。(6)を見られたい。(6)において喜びを喚起するものは「彼の口調」である。しかし、具体的にどのような口調だったので一座の笑いを誘ったのか、喜びを喚起したのかを解釈するのは容易ではないし、その必要もないように思える。先行研究の指摘通り、タノシイがウレシイと違って、特定の対象を持たなくてもよいことの現れであろう。

(6a)「この画はみたけどね、落としたんだ。輸出向きとかなんとか、そんな大げさなことじゃない。これは下手なんだ。だから落とした。あたりまえじゃないですか」一座は彼の口調に楽しそうに笑った。

(6b)"i kɯrim-ɯn simsa ttɛ pwat-ciman naksɔnsikhyɔt-ta. suchul cɔkhapsɔŋ-i-ni
この　絵－主題　審査　時　見る·過去－接　落選させる·過去－終　輸出　適合性－叙述－接

mwɔ-ni ha-nɯn kɯrɔn ɔmchɔŋna-n iyu-rosɔ-ka ani-ta. ikɔs-ɯn kɯrim-ɯro cal twe-ci
何－接　言う－冠　そんな　大げさだ－冠　理由－具－否定－終　これ－主題　絵－具　うまく　なる－

mothɛt-ta. kɯrɛsɔ naksɔnsikhyɔt-ta. taŋyɔnha-n ir-i ani-o?" iltoŋ-ɯn kɯ-e malthu-e
不可能·過去－終　だから　落選させる·過去－終　当然だ－冠　こと－否定－終　一同－主題　彼－属　言い方－処

cɯlkɔun tɯsi us-ɔt-ta.　（『裸の王様』20512/13327）
CLK·様態　笑う－過去－終

以上のように、ウレシイ／タノシイは喜びを喚起するものの個別性で、kippɯta/cɯlkɔpta経験主の判断か経験かよって区別されると言えよう。

ここで、ウレシイとkippɯta、タノシイとcɯlkɔptaが対応する例が5割前後あるのは、それぞれ喜びを喚起するものが特定のものであれば、判断の結果であると解釈されやすく、何らかの場面や状況ならば、経験主もそれを経験すると解釈されやすいからであろう。また、ウレシイとcɯlkɔptaが対応する例が1割程度あったのは、ウレシイを喚起する事柄によって経験主が何かを経験できると解釈できる場合が、それほど希ではないからだと思わ

れる。

4．喜びの起こる状況

拙稿(2008)は恐怖の感情を表すtulyɔptaが理性の処理を受ける度合いの低い感情であることの根拠に、対象が想像の出来事でありうること、突発的に起こる感情でありうることの２点を挙げた。上の(2)(3)ではウレシイとcɯlkɔptaが対応していたが、喜びを喚起することがらはまだ起こっておらず、経験主の想像の域を出ていない未確定の事柄である。一方、ウレシイとkippɯtaが対応している場合では、そのような例はなかった。このように、cɯlkɔptaはkippɯtaに比べると直感的な感情であるのかもしれない。しかし、喜びが突発的に起こると解釈できる例は、ウレシイとcɯlkɔptaが対応している例にも、kippɯtaと対応している例にもなかった。そこで、ここではcɯlkɔptaはkippɯtaに比べると直感的な感情である可能性があるとを指摘するにとどめ、今後の課題としたい。

しかし、ウレシイは突発的に起こる感情でもありうる。(7)を見られたい。「大きい砂の山」が「道路のはじのほう」にあるのは、「トットちゃん」にとって思いがけないことだったに違いない。したがって、ウレシイという感情もそれを見た瞬間に起こったものと思われる。

(7a)学校からの帰り道、家の近くまで来たとき、トットちゃんは、道路のはじのほうに、いいものを見つけた。それは、大きい砂の山だった。（海でもないのに砂があるなんて！こんな夢みたいな話って、あるかしら？）すっかり嬉しくなったトットちゃんは、一回、ポン！と高くとび上がってはずみをつけると、それからは、全力で駈けて行って、その砂の山のてっぺんに、ポン!!と、とびのった。

(7b)hakkyo-esɔ torao-nɯn kil, cip kɯnchɔ-esɔ thotho-nɯn acu maɯm-e tɯ-nɯn
学校－処　帰る－冠　道　家　近く－処　トット－主題　たいへん　心－処　入る－冠

kɔs-ɯl palkyɔnhɛt-ta. kɯkɔs-ɯn toro kacaŋcari ccok-e nophtarah-ke ssahyɔ it-nɯn
もの－対　発見する·過去－終　それ－主題　道路　端　方－処　うず高い－副　積まれる－状態－冠

morɛtɔmi-yɔt-ta. (waa! pata-to ani-nte morɛ-ka it-tani, irɔh-ke kkum-kath-ɯn yɛki-ka
砂山－叙述·過去－終　間投　海－添加　否定－接　砂－主　ある－接　こんなだ－副　夢－同じ－冠　話－主

iss-ɯlkka!) nɔmuto sin-i na-n thotho-nɯn hanpɔn pholccak! nophi ttwi-ɔ olla
ある－疑　あまりに　浮き浮きする気持ち－主　出る－冠　トット－主題　一度　ぴょん　高く　跳ねる－副　上がる·接

thanlyɔk-ɯl puthi-n taɯm, cɔnsoklyɔk-ɯlo tallyɔka kɯ morɛtɔmi kkoktɛki-ro hwik!
弾力－対　付ける－冠　次　全速力－具　走る·接　その　砂山　頂上－方向　ひょい

ttwi-ɔ ollat-ta.　（『窓ぎわのトットちゃん』13707/10901）
跳ねる－副　上がる·過去－終

(7)のウレシイはsin(-i)nataと対応している。タノシイもsin(-i)nataと対応している例があるが、突発的な感情と解釈できる例はなかった。また、タノシイとcɯlkɔptaが対応している例にもなかった。一方、タノシイがはっきりと未確定の事柄に関わって起こる喜びであると解釈できる例もなかった。このように、ウレシイは直感的に把握される感情でもあり、タノシイはそうではないと言える。

以上のことから、理性の処理度を尺度に取れば、データで見る限り、タノシイとkippɯtaが理性の処理度が一番高く、次にcɯlkɔptaが来る可能性があり、ウレシイは理性の処理度

がタノシイとkippɯtaと同じくらい高い場合からcɯlkɔptaよりも低いところまでを覆うと言えよう。

5．連用表現と連体表現

紙面の関係で詳細は省くが、ウレシイ／タノシイがいわゆる連用形・連体形におかれたときの被修飾語を調べてみると、ウレシイの修飾を受ける動詞や名詞よりもタノシイの修飾を受ける動詞や名詞の方が多様であった。これは、ウレシイよりもタノシイの方が、連用表現・連体表現によく用いられるという、先行研究の指摘と合致する。タノシイの方がウレシイに比べ、多様な動詞や名詞と結びつきやすいということは、それだけ意味的に規定できる動的事象や事物に制約が少ないということである。これはタノシイがウレシイより個別性が低く、逆に一般性が高いことを意味する。また、これも紙面の関係で例を省くが、連用表現においても特定の経験主が想定されていない例があった。これも、タノシイの経験主との関連の薄さ、個別性の低さ、一般性の高さを示している。

しかしながら、日本語では、特定の第３者が喜びを感じていると思われる状況は、～ソウニによって表現しなければならない。これに対し、cɯlkɔptaは次の例のように「-ke副詞形」によっても同様の状況を表すことができる。これは、cɯlkɔptaが経験主の外面的な様子、すなわち「cɯlkɔptaと感じているさま」を表すことができることを意味するだろう。そして、これは、経験主の経験という動的な側面に由来するものと考えられる。しかし、kippɯtaには同様の例がなかった。

(8a)プールの横にある、小さくて四角いコンクリートの足洗い場に住んでる金魚は、黒の出目金をはじめ、みんな、それまで、じーっとしていたのが、のびのびと楽しそうに体を動かしていた。

(8b)suyɔŋcaŋ yɔph-e`cak-ko nemona-n khonkhɯrithɯ sutotka-e sal-ko it-nɯn
プール　横－処　小さい－接　四角だ－冠　コンクリート　水道端－処　住む－継続－冠

kɯmpuŋɔ-tɯr-ɯn tto ɔttɔ-nka! kkamansɛk nun-i ttwi-ɔ nao-n kɯmpuŋɔ-rɯl
金魚－複－主題　また　どうだ－疑　黒　目－主　跳ぶ－副　出る－冠　金魚－対

pirotha-yɔ ta-tɯl yɔthɛkkɔt kkomccakanh-ko it-taka, machimnɛ phyɔŋhwarop-ko
始める－過去　みんな－複　これまで　じっとする－継続－転換　ついに　平和だ－接

cɯlkɔp-ke heɔmchi-ki sicakhɛt-ta.　（『窓ぎわのトットちゃん』19602/15808）
CLK－副　泳ぐ－名　始める·過去－終

このように、ウレシイとcɯlkɔptaが人称制限が緩やかなのは、ウレシイの個別性の低さ、cɯlkɔptaの経験的性格の強さに由来するものと考えられる。

6．まとめ

データの範囲内で導かれる結論は次のようである：1) ウレシイ／タノシイの区別は喜びを喚起するものが個別的か一般的かによる。一方、2) kippɯta/cɯlkɔptaの区別は経験主の判断的側面が強いか経験的側面が強いかによる。このように、kippɯta/cɯlkɔptaは、経験主側の喜びを喚起するものへの接触の仕方の違いを反映しており、主体（経験主）依存的であるのに対し、ウレシイ／タノシイは喜びを喚起するもののの個別性という、状況依存的な性質を反映している。また、この他に、詳細は今後の課題であるが、理性の処理程度

という点からもこの４語の意味は各々違いがある。結局、喜びという感情を表す形容詞は、意味的に主体依存的か状況依存的かということと、理性の処理の程度という２つの次元で把握できることになる。他の感情形容詞ではどうか、また、これらの次元は、さらに単一の次元に還元できるか、あわせて今後の課題としたい[4]。

注

1) 喜びを表す動詞としては、日本語にはウレシガル、タノシム、ヨロコブがある。このうち、本来の動詞はタノシム、ヨロコブだろうが、３語ともウレシイ、タノシイとともによく用いられる。一方、kippɯta/cɯlkɔptaは歴史的には動詞からの派生であるが、kippɯtaの元になった動詞kikstaは現代では古語に属すのに対し、cɯlkɔptaの元になった動詞cɯlkitaは現代でも用いられる。また、kippɯta/cɯlkɔptaからも動詞が形成され、現代語としては、両言語とも「喜び」の意味を担う動詞・形容詞は数が多い。そこで、まず形容詞を扱おうと思う。

2) 以下のものを使用した。筆者が使った版と初版の年が違う場合は両方を示した。また、用例もこれらから採用した。

安部公房『壁』新潮文庫あ-4-2、新潮社2005年／1969年〔서병조「벽」:서병조「하얀 사람 외」문예춘추사1999年〕

石原慎太郎『完全な遊戯』新潮文庫（草）119Ｃ、新潮社1978年／1960年〔申東漢「完全한 遊戯」：日本短篇文學全集Ⅵ」新太陽社1974年〕

遠藤周作『白い人』：小田切進（編）『日本の短編小説　昭和（下）』潮文庫97D、潮出版社1977年／1973年〔서병조「하얀 사람」:서병조「하얀 사람 외」문예춘추사1999年〕

大江健三郎『飼育』：大江健三郎『死者の奢り・飼育』新潮文庫お-9-1、新潮社2004年／1959年〔서병조「사육」:서병조「하얀 사람 외」문예춘추사1999年〕

開高健『裸の王様』：開高健『パニック・裸の王様』新潮文庫か-5-1、新潮社2004年／1960年〔서병조「벌거벗은 왕」:서병조「하얀 사람 외」문예춘추사1999年〕

北杜夫『天井裏の子供たち』新潮文庫（草）131N、新潮社1979年／1975年〔李柱訓「天障속의 少年들」：「日本短篇文學全集Ⅵ」新太陽社1974年〕

黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』講談社文庫く$\frac{10}{1}$、講談社2004年／1984年〔김난주「창가의 토토」프로메테우스 출판사2002年/2000年〕

小松左京『日本沈没（上）』光文社文庫こ21-1、光文社2000年／1995年〔이정희「일본침몰 上」미래사1995年/1992年〕

筒井康隆『文学部唯野教授』岩波書店1990年〔김유곤「다다노 교수의 반란」문학사상사1996年〕

松本清張『１年半待て』：『松本清張短編総集』講談社1971年〔表文台「一年半 기다려 주

세요」：「日本短篇文學全集Ⅴ」新太陽社1974年〕

三浦綾子『氷点（上）』角川文庫5025（み5-3）、角川書店1998年／1982年〔최현「빙점(上)」범우사르비아문고27, 범우사1989年/1981年〕

三島由紀夫『橋づくし』：小田切進（編）『日本の短編小説　昭和（下）』潮文庫97D、潮出版社1977年／1973年〔閔丙山「踏橋」：日本短篇文學全集Ⅵ」新太陽社1974年〕

吉本ばなな『キッチン』角川文庫10713（よ11-8）、角川書店2007年／1998年〔김난주「키친」민음사2006年/1999年〕

吉行淳之介『鳥獣虫魚』：小田切進（編）『日本の短編小説　昭和（下）』潮文庫97D、潮出版社1977年／1973年〔吳成鎭「鳥獸蟲魚」：「日本短篇文學全集Ⅵ」新太陽社1974年〕

3) 朝鮮語の形態分析に用いた略語は以下の通りである。また、kippɯtaとcɯlkɔptaの語幹は、環境によって末音が変化するので、形態分析の中ではKIP, CLKとしている。

引冠：引用冠形詞形、冠：冠形詞形、感：感嘆形、完：完了形、間投：間投詞、疑：疑問形、共：共同格、具：具格、主：主格、終：終結形、処：処格、叙述：叙述語幹、接：接続形、属：属格、対：対格、転：転成格、副：副詞形、複：複数形、名：名詞形、与：与格、、１代：１人称代名詞

また、（　）内に、‘／’の左にオリジナルの、右に翻訳の該当個所の先頭を五桁の数字（最初の三桁がページ、次の二桁が行）で示した。

4) 拙稿(2008)では、朝鮮語の恐怖を表すtulyɔpta/musɔptaは、認知上の理性の処理程度によって区別されるとした。認知上の理性の処理は経験主依存的と言ってもよさそうだが、kippɯta/cɯlkɔptaの場合、理性の処理程度の差異がはっきりせず、かりにあったとしても極端な差がなさそうなので、経験主依存的であることと理性の処理の程度を一律に一つにまとめてしまうには、今のところ十分な根拠があるとは言えない。同じ問題は悲しみ表す形容詞にも予想される。

言及した文献

寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.

西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所. 秀英出版.

西尾寅弥(1993)「喜び・楽しみのことば」『日本語学』第12巻第１号. pp.14-22.

深見兼孝(2008)「日本語のオソロシイ／コワイと朝鮮語のtulyɔpta/musɔptaについて」『ニダバ』第37号. pp. 173-182.

森田良行(1977)『基礎日本語１』角川書店.

유현경(1998)국어　형용사 연구. 한국문화사.

임홍빈(1993)뉘앙스　풀이를 겸한 우리말 사전. 아카데미하우스.